

して此氣候に對しては大人は尙ほ忍ぶべし、其出生の兒に至りては多くは生後數年内に仆るゝのであつて之れが永住をなし難き最大原因と云ふことも出来る。

斯くの如くであるから上述の如く白人の此地に來りしより四百年の歲月を經るに其現在數約七萬に過ぎず我邦人が臺灣占領後僅かに二十年にして十五萬人の内地人を數ふに比すれば其差の大なるを知る、而して此事が又爪哇以外の蘭領印度が開發せざる一原因である、米人ハルバートが最近民族の發展は須らく同緯度の方面なるべしと云へるは白人に取りては眞理と考へらる (H. B. Hubert, Japan and Isotherma Empire.—The Journal of Race Development, April 1916.)

故に爪哇に於ける白人の運命は氣候上より觀察すれば甚だ望み少なしと云ひ得べく、由て起る問如きは所謂顯はれたる偉人ならん、藤門に於ける

題は彼地に在る他の東洋諸人種の氣候に對する關係の研究であるが之は追て編を改めて論ずる積りである。

叢 說

隠れたる陽明學者——淵岡山先生

文學博士 高瀬武次郎

一、緒 言

均しく鴻儒たりし人も能く當時に知られ又能く後世に傳はれる者と、然らずして當時にも顯達せず又後世にも傳はらざる者あり、前者を顯はれたる偉人と謂へば後者を隠れたる偉人と謂つべからん今之を中江藤樹先生の門下に就きて考ふるに、淵岡山の如きは所謂隠れたる偉人にして熊澤蕃山の

岡山と蕃山とは相比肩すべきものにして高下を爲すべからざるものなり、鴻儒自身に於ては各自其と欲する所に従ふて世に立ちしものなれば其顯否の傳否とは毫も關する所に非るべけれど、後人より之を觀れば其間に宛然不幸の存するが如く思はるゝは謬見なるか、兎に角後人が隠れたる偉人を表彰するは當に然るべき所にして其の遺徳を感謝すると共に自ら奮勵する所以なり。

二、 藤樹先生と岡山子との關係

岡山先生と藤樹先生との關係を察するに志村仲昌著の藤樹先生行狀聞傳に曰く、「先生淵子に示さるゝ處致良知の學術能く體認し、世に執り行はば天下の寶たるべしと示教せらるゝこと骨髓に徹し云々」と是れ蓋し岡山子が深く致良知の學に入るの端緒なりしなるべし、岡山子は藤樹先生を欽慕すること甚だ厚く種々なる方面より之を尊敬篤信したるものならん、詩に所謂西より東より北より

南より思ふて而して服せざるとなしと云ふものはなり、川田剛の撰に係る藤樹先生年譜に曰く、

正保元年甲申先生三十七歲

冬、淵岡山始テ來リ謁、退而語レテ人ニ曰、先生非ニ獨リ徳容可レ敬ス、聰明才智モ亦有下不レ可ニ企及一者、先生聞レ之歎曰、吾常ニ恐レ以ニ聰明才智一加之人、務テ韜ニ藏之ニ猶不レ免有レ時發露ス、彼之所ニ以美レ吾者ハ即吾之所ニ以自恥レ也

藤樹先生が徳行家たるのみならず其犀利なる才智は終生の言動事業に徴して明かなり、岡山子が之を看破して評を爲すも其の炯眼を知るべく、藤樹先生が常に其の英氣才鋒を發露せざるに注意せしは能く徳行家の模範たり得る所以なり、尙ほ現今通行本の藤樹全書中の數條を左に掲ぐ、先づ藤樹先生が東府即ち江戸に行きし時其の別を送りて詠める歌を示さん、

送ニ淵子ノ行テ

あさからぬわかれをいとふ情あらば

遠近のなき心よく持て

案するに此歌は師弟相互離別を惜むの情が淺からぬならば、宜しくをちこちと懸隔のなき心を能く持たれよとの意なり、遠近のなき心を能く持てとの告辭は眞に藤樹先生が陽明學の態度より發せられたるものなり、師弟贈答の歌が悉く心學的たる所は特に注意すべきならん、次に示す所の歌は岡山先生が江戸に行きし後に藤樹先生に呈せしものなり。

淵子東府に在住せし時先生へ書通の末に

蓬生にすまてたよふ我身かな

こみをくらひてむさしとぞ思ふ

此一首の意を案するに蓬の生ずる田舎の靜かなる土地に安住せずして漂流する我身は哀れむべきものなるよと歎き、塵埃を食ふて武藏と思ふと武藏の江戸に行きて江戸の名物なる街上の塵埃の風に

吹き廻はされて行人の目鼻や口に入るを煩累と感じたるを示せり、江戸は昔より黄塵萬丈の土地なりしと見ゆ、今日の如く道路の修繕の行き届きたる後も猶ほ風の吹く日は行人の困難すること少からず、蓋し岡山先生が藤樹先生の門を去りて江戸に漂流して煩累を感じたる様子を詠せるものならん、

次に藤樹先生が右の歌に酬いて詠せられたる一首を示さん、

丁亥之秋淵子の歌に答ふ

こみちりもいとへはむさし厭はねば

濁りたる世もみな隅田川

此の一首の返歌を誦するも藤樹先生の面目躍如として其の徹底せる状態を示せるを知るべし、武藏と云ひ清み田と云ふ皆な江戸の地理上の縁語を假り用ひたるものなり、混濁せる世も自家の心の持ち方にて清潔なる世と觀らるれば塵埃をむさしと

觀せずして、心眼を以て世の中を清觀せよとの返歌は流石に師たる藤樹先生なるかなと思はる、以上三首の和歌は現行本の藤樹全書卷の十に掲載する所なり、猶ほ他にも岡山先生の作れる詩歌文章多からん、余は切に之を見んことを希ふ、余は嘗て藤樹書院に岡山先生の和歌の短冊の藤樹蕃山二先生の和歌と共に合裝保存せらるゝを見しことを記憶すれども、今は其の歌の何を詠せしものなるかを思ひ浮べず、されど既に藤樹書院に存すれば之を見ること難からず、

次に藤樹先生が諸生に代りて岡山先生に答へられたる尺牘一通を示さん、

答フ淵宗誠ニ書 諸生に代りて

奈良茶の味能御呑込なされ候旨、左候はば、心法の理味をも能御呑込候はんと存珍重珍重如何となれば、奈良は春日の鎮坐し給ふ處、春日は良知の象なり、茶は煩を除き、頭目を

清くする氣味あり、然れば良知の太陽出て、世間の拘攣の煩熱を除き、懊惱の頭痛、止みぬるに、其名義能く叶ぬる故なり、斯いへば狂言奇語の類にやあらんと成れ共、君子にも戲謔ありと聞にこそ、去れ共第一等のことをと庶幾而已々々(藤樹全書卷十)

惟ふに此書簡は岡山先生が奈良に住せし時或は奈良に遊歴して奈良茶を味ひたる頃の書中に茶味を會得したることを記して同門諸生に興へられし時藤樹先生が諸生に代りて返答せしものならん、此頃は藤樹先生が充分に良知學を信奉されし後なりしを知る、春日を良知の太陽に見立て、茶味の身心を清爽ならしむるより心の煩悶を除去するに説き及ぼせる所は、頗る藤樹先生の宇宙を道化するの消息を窺ふべきなり、藤樹先生は眞面目なる人なりしやうなれども、時々諧謔を雜へて門人を開導するの方便とせられしにや、此の書面は正しく

其の適例なり、

志村仲昌著、藤樹先生行狀聞傳に曰く

藤樹先生曰一人の農夫の勤めと自身の作用と一般の由語生に御示し候ひつる此義今に自得なし難く候貴境にても御試み御尤に候此中越氏發明に農夫の勤め一日も間斷候ては其業怠りて若し加藤の主意にても可有之哉と申事に候依之考ふるに吾人今日農業の勤を怠る而已ならず秋實の米穀をばした、か納め置徒らに遣ひ費やし地頭殿へは夥しき未進可有之候と存候いつも申通先生一坐の議論不親切成まきは何となく淀舟咄になりたり我等は年貢をはかり申べしとておもやへ御歸り候ひき是を以て察するに吾儕毎日毎坐未進而已と恐れ多く候以上

九月十七日

岡小予淵氏ト

諸君に

岡山子は篤信の性質なりしものと見ね、藤樹先生の没後には之を皇孫火瓊々杵尊たる高千穂大明神と共に祠堂を家園に建て歳時之を祀れりと云ふ、斯かれば其の教脈を奉ずることも極て厚く純然たる藤樹學を講じて其身を終り復た多數の弟子を教導したり、

岡山先生の書簡は上中下三卷あり寫本にて今日に傳はり其の文辭及び和歌は之を見ることを得れども之に由りて察するに先生は文辭詩歌に巧なりし人にはあらざるが如し、漢文も其當時には多少作られしならんも多くは既に滅びて希に傳はるのみ、左の祝文は陽明學雜誌第八號より摘録したるものなり、以て先生の文藻の一端を知るを得べし且つ此祝文は岡山子が家塾内に藤樹先生の祠堂を新築して藤夫子の靈を高千穂大明神と共に新堂内に奉祀したる時の作に係れり、

○祝文(其一)

維

延寶四年、歲次丙辰、八月丁酉、越、辛亥朔二十有五日、(恐有誤脫)乙亥、末葉諸生一同 敢昭告于 藤樹夫子靈座、九衢陰棲

我

藤樹先生草堂築成、于時延寶丙辰秋日也、

於レ是ニ奉レ表ニ忌日之祭祀一、

先師嘗テ憤ル、學者立ニ身ヲ天地間ニ、惟出與處

而已、出レハ則發シテ爲ニ經綸一、思_ハ以兼テ善_ニコトヲ

天下ニ、處レハ則蘊メ爲ニ康濟一、思_ハ善ニ其郷ニ以テ

先_中細民_上、未_ニ嘗_テ無_レ所事_レ事_ヲ、若シ徒

ニ輕肥蕩恣、虛_ク生_キ甘_メ與_ニ草木_一同_ニ朽腐_一、是

上流ノ凡夫也、能_ク無_レ恥乎、今吾黨_モ亦乾坤得

意ノ人也、是_レ不_レ思乎、嗚呼願_ク因_ニ

先師之德化_一、討習講論、得_ニ輔仁ノ益_一、以立

有_ニ必登_ニ聖域_一之志_上、全_ク脱_ニ却_メ凡情_一而精

餐_ニ義入_レ神_ニ而已_一 尚

○祝文(其二)

丙辰之歲、秋之季朔、于_ニ此地_一奉_ル

勸_ニ請_一

高千穂大明神_一、以_テ綴_リ野詩_ヲ、抒_フ卑志_ヲ

誠恐誠惶述_ニ卑懷_一、以_テ準_レ祀_ニ示_レ爾、淵萬再

拜千秋萬歲是ノ時_ニ屯_ス 孝德一ニ貫_ス天地人_一

日繼_キ光華无_ク息道、照_ニ臨_ス水穗_一

大明神

藤樹先生の詩歌の如きも詩人の詩に非ずして唯だ其道を陳ふるに詩歌の形を假れるのみ、岡山先生の詩歌も亦た之を普通の詩歌として見るべからず且又陽明學第八號に見ゆる、岡山先生の作れる藤樹先生祠堂記は假名交り文にて稍長く循々道を説けるものなり。

高千穂大明神とは何神なるか。

余が今回該論文を草するに際して高千穂大明神てふ神號を見て其の何神たるやを知るに苦めり。余の淺識寡聞なる平素は未だ嘗て高千穂大明神の神號を耳せしことなく、且つ突如として岡山先生の遺文中に神て簡單に唯だ其神號を掲げられたるものを見しのみなれば、最初は別に斯かる御名の神の在ますや否やを疑ひ、復たび或は岡山子が藤樹

先生の靈に對して奉呈せる神號たるべきかを疑ひ自ら孰れか是なるを決定すること能はざりき、藤樹先生の靈に高千穂大明神の神號を奉呈するは頗る異なるものと思はれんも、元來岡山先生の熱心なる神道信奉者にして皇國諸神を説けることも少

からず、此點より考ふるも、先生が尊信敬慕する藤夫子の靈に對して神號を上りて之を奉祀するはあり得べからざる事にはあらず、猶ほ學者に大明神の神號を命するの例も亦た之れなきには非ず、今其の一例を示さんか。高倉天皇の侍讀清原賴業は京都西郊外嵯峨に奉祀せられ、後嵯峨天皇號を賜ひて車折太明神と曰へり、北野の天滿宮と車折太明神とは我國文學の守護神と稱せられ、太田錦城の如きも北野天滿宮に參拜の時は必ず車折神社にも參詣せりと云ふ、然れば藤樹先生は存命中既に近江聖人てふ尊號を保ち學徳共に卓越せし人なれば之を尊崇して神號を上つるとも亦た固より異

とするに足らざるなり、上述の如く考へたる後ち余は暫時高千穂太明神は藤樹先生の神號ならんご疑へり。

且つ既に掲ぐる如く岡山先生の延寶四丙辰の年に藤樹先生祠堂落成式の前の祝文には先師藤樹先生之靈と云ふ句を用ひ、終の祝文に至りて延寶丙辰之秋、此地に於て高千穂太明神を勸請し奉ると云ひ、其の結末に於て蕪詩を作りて卑志を抒ぶと云へる詩句も前二句は宛然藤樹先生の孝徳を讚歎したるが如く、後二句に日續ヒツギ光華ヒツギ先ヒツギ息道ヒツギ照臨ヒツギ、水穗ツミ太明神とあるのみにて、稍不明瞭を免がれず詳言すれば別の處に在ます太明神を勸請するの意か、或は藤樹先生の靈を高千穂太明神と號し上れるか判然せざる點あり、故に余は該祝文を再三翻讀せしも疑團を求解すること能はざりき、猶又た後に掲ぐる所の篠原元博の記述せる文にも藤樹先生下世せられ、岡山子は思慕止まず、已にして祠

を園中に立て勝して高千穂太明神と曰ふと爲すのみなれば、別地に此の御名の神ありて藤樹先生の靈と共に此祠堂内に奉祀するの意なるか、將た藤

樹先生の靈を高千穂太明神と勝せしものとするか

甚だ不明瞭なり、且つ篠原元博は其次に岡山先生

の奉祠の意を略述し、支那の聖人も日本の聖人即

ち藤樹先生の如きも其揆一なり、太古の事は渺邈

たれば見るべからざれども幸に今之を藤樹先生に

於て觀るを得たるを喜ぶの意を示せるのみなり、

此文を幾度熟讀するも唯だ勝曰高千穂太明神の外

は新意義を發見するを得ざりき、之を要するに、

余は上掲の二種の古文書即ち祝文と篠原氏の文と

のみにては其の孰れが當を得たるかを決定する能

はざりき、是に於て余は更に他の方面より之を探

究する方法を取らんと欲して、我が友、下加茂

神社宮司祝儀鷹氏に就きて高千穂太明神の何神た

るかを問へり、祝氏は余の爲に討究の勞を執られ

終に神祇全書第二輯の内、神祇寶典卷九に於て高千穂神社てふ神名を發見したり、其の日向國の部に曰く、

式外

高千穂神社

皇孫火瓊々杵尊也、始^メ皇孫天降^テ而到^ニ筑紫、日向

高千穂^ノ穗^ノ觸^レ之^ニ峰^ニ、即^チ此地也、

天安二年十月巳酉、日向國從五位上高智保神

授^ニ從四位上^ト

と、惟ふに是れ即ち高千穂太明神を奉祀せる社を

高千穂神社と曰へるならん、神祇寶典には高千穂

太明神てふ六字の神名は見わざれども、神社は社

を主として唱へ、太明神は神體を主として呼びた

るの差のみにて結局は同一神なりと見て可ならん

又た彥火瓊々杵尊の彥の字は日の子の意味にて尊

稱なれば彥の字なしと雖も皇孫彥火瓊々杵尊と同

一神なることも明かなり、蓋し醍醐天皇時代以後

に於て降臨の地を記念し、皇孫を尊崇する爲に此地に即きて神社を建てられたれば式外の神と曰へるならん。

却説京都東山禪林寺永觀堂の墓地なる淵伯養の碑陰の文に岡山先生の先は日向國之人なりとあるより推考すれば、岡山先生が其の祖先の國たる日向國に降臨ましまする高千穂太明神を先師藤樹先生の靈と共に一新祠堂に奉祀するは固より怪むに足らざるなり、余は神祇寶典の文に據て高千穂太明神は即ち皇孫火瓊々杵尊たることを決定し得たり願て復び引用せる二種の古文書を看れば眼界の暗雲は何時しか四散して皎々たる明月を觀るの感あり、然れども猶ほ探求上の錯誤あらんことを恐るれば江湖博雅の君子に就きて之を質さんと欲す、請ふ示教を吝む勿れ。

岡山先生の和歌は既に一首を掲げたれども猶ほ左に岡山先生の書簡上中下三卷中に見ゆるものを

示さん、(陽明學雜誌第八號にも之を掲ぐ)

山家のこゝろをよめる

山里はおくもかくれぬさゝ垣のあらはに安き人のこゝろも

柴の戸をおしたてもせで出る跡に心もおかす澄める月かげ

京の西山の紅葉を或人に見せばやとてせめて此腰折にて自得あれとて

一枝の色はいろかは紅葉ばの山のすがたにこゝろあるかな

中秋人人に誘はれて廣澤の月見に

誰れかその人に習ひて廣澤の今宵最中の月を見るかな

試筆

ことくはわきていはふは習ひぞと身のいと
まある春にあふ哉

岡山先生書簡の中に猶ほ多數の國風あれども今は

逐一掲げず、右書簡は京都大學圖書館にも藏せば就きて見るべし。

現今通行本の藤樹全書の大木月峰の撰に係る藤樹先生行狀に曰く

嘗有門人淵氏、自横江濱乘船到小川、以日晚天寒船郎甚勞、増其價價與之、先生聞之曰、好仁仁不好學學其蔽也愚、人人所務皆當爲之職分而其所得亦有定分、是自然之天祿也、固不可可以私滅之、亦不可可以私増之、汝何何不致思於此乎云々

一讀以て藤樹先生の教導法の嚴正なりしを知るべきなり、

志村仲昌の著、藤樹先生行狀聞傳に曰く

淵源兵衛は奥州會津の人にて京都に學問執行して葺屋町（京都）に寓居あり先生の學術を慕ひ小川村へ尋ね來て學業を受用す先生淵子に示さる、處致良知の學術能く體認し世に執行は天下の寶たるべしと示教せらる、事骨髓に徹し先生物故

の後葺屋町に祠堂を建立し藤樹子の神主を儲け諸生を招き學を講じければ同志も多く集會あり岡山先生と門人嘆稱す云々
「仲昌は江州小川村の人、藤樹書院の東隣に住す、即ち大阪大鹽樂兵の時に横死したる志村周次の幾代かの先人なり、行狀聞傳は文辭は拙なれども史實は信すべきものならん、此書は寶曆三年七十四歳の時の著なり

三、會津に於ける藤樹岡山

二先生の影響

淵岡山先生の事蹟は從來世に知られず、或人は岡山と云ふ號より誤りて想像を逞くし、備前の岡山の蕃山の事ならんと認めたる者もありたる程なりしが、岡山と蕃山とは藤樹門下の二鴻儒なり、斯かれば從來我邦の儒者列傳、先哲叢談特に陽明學者を傳せる書中にも岡山は唯だ其姓名を存するに過ぎざりしなり、然るに近年岡山先生を研究する者續出し、諸方面より僅少ながら材料を出し或は陽明學雜誌に或は講演に發表するに至れり、江州の笠井劫、小川喜代藏兩氏共撰として淵岡山と

題し東京明善社發刊の雜誌「陽明學」の第八、九、十、の三號に連載せり、蓋し有益なる參考資料なり、就中其の最も有力なるものは齋藤一馬氏が陽明學雜誌に投載せる三浦親馨氏が撰せる會津藤樹學道統譜に如くはなし、之を得て岡山先生の學統即ち藤樹先生の學統の會津陽明學統の淵源たることを知るのみならず岡山先生が藤樹門下屈指の大儒にして孔子に顔回ありしが如く、岡山先生の教化は廣く二十餘國に及べしことを知り、且つ岡山先生が如何なる閱歷を有せし人なりしか、又何故に岡山先生の孫養子葭郷が遠く會津より來れるかの理由を推知することを得たり、三浦氏の作れる道統譜は眞に岡山研究に一道の光明を與ふるものなり、其岡山先生を叙する文に曰く、(原は漢文)

岡山先生、氏は淵、諱は惟元、四郎右衛門と稱す、故ありて、源右衛門と改む、洛外の岡山に住す、故に門人は岡山先生と稱せり、奥州仙臺の隠士なり、江戸に至りて幕臣一尾伊織に仕ふ、江州に伊織の食邑あり、先生は生命を以て廢之に赴く、

第二卷 叢說 隠れたる陽明學者—淵岡山先生

藤樹先生に見て業を門に受け夫子の高弟と爲ること孔子に顔回あるが如し、夫子没して、京師に至りて學館を造營し先師の祠堂を建て其道を二十餘國に廣む、實に當世の大賢にして藤學之宗と爲る、貞享三丙寅年、十二月二日卒す、東山の永觀堂に葬る、門人數百人あり

永觀堂の淵岡山之墓の裏にも「貞享三年、歲丙寅に次す、臘月初二日卒す」と記せり、永觀堂の墓地の東南端に淵家の墓十餘基並立せり、今は來て苔を掃ふ者も希なれば守墓の老婆は無縁の墓かと疑へりと語れり、以て淵家の現狀を推知すべし、次に會津に於ける岡山先生の門人を記して左の如く曰へり、

大河原養伯は會府の人なり、醫術を精む、荒井眞庵と與に諏訪神社に祈り、實學長師を求む、神宣を得て、共に京師に至り岡山先生に謁し、良知の微妙を學び、同く歸りて而して矢部總(一)に宗四郎に告ぐ、是れより藤學は會津に周流し、荒井子と共に會津藤學の祖と爲り、子孫は會侯に仕へ世々醫官たり、次に岡山の弟子荒井眞庵を記して曰く、

荒井眞庵は會府の人なり、亦た醫學を嗜む、大河原子と二人

第二號 三九 (二三五)

にして而かも一人なり、實に異體同功の人と爲す、

次に岡山の弟子矢部總四郎の事を記して曰く、

矢部總四郎は會津の北郷小荒井町の人なり、諱は惟方、聰明、常人に異なり、荒井、大河原兩子の言を聞きて京師に赴き岡山先生に學ぶ、先生曰く、四方に使用して君命を辱しめざる者と謂ふべしと、會に歸りて後ち、五十嵐養安、遠藤謙安、東條長五郎の三子に告ぐるに岡山先生の學徳を以てす、三子洛に上りて岡山先生に謁して、斯道の微妙を得たり、矢部は不幸短命にして而して死せり、然れども徳化は朽ちず、實に會北醫學の宗と爲る、延寶五、丁巳年十二月二十九日卒す、

次に岡山の弟子五十嵐を養安を傳して曰く、

五十嵐養安は會津北郷小田付町の人なり、性は平、謙は直元、覺兵衛と稱す、其の洛に上りて岡山先生に學べるは矢部の條に記するが如し、其名は都鄙に鳴る、京洛の儒者は遠藤東條と同じく會津三子と稱す、寶永五、戊子年三月朔日卒す、年六十七、岩崎村の大用寺山に葬る

次に岡山の弟子遠藤謙安の事を叙して曰く、

遠藤謙安は會津北郷の岩崎村の人なり、村長と爲り、後ち移りて漆村に住し、小沼組郷頭と爲る、諱は玄道、庄七郎と稱す、岡子常尹をして郷頭の職を襲がしめ、自ら謙安と號せり、其

の岡山先生に學べるは矢部の條に記する所の如し、父母に事へて至孝なり、會津中將之を嘉賞す、其事蹟は會津孝子傳及び日新館童子訓に載す、正徳二壬申年十一月二十七日卒す、岩崎村の大用寺山に葬る、

又た岡山の弟子、東條長五郎の略傳に曰く、

東條長五郎は會津郷上高領村の人なり、村長と爲る、諱は方秀、其の岡山先生に學べるは矢部の條に記する所の如し、孝を以て聞ゆ、會津中將之を嘉賞す、事は會津孝子傳に載す、兄田邊一夢は新井田村長と爲り、禪學に深し、元祿九丙子年二月十七日卒す、十八箇條問記を著し今尚ほ存せり

五十嵐、遠藤東條三子に親炙して藤學を信する者は落合權太夫、伴清左衛門、一柳氏（名不明）大原六太夫、牧原源六、牧原只右衛門、村越七右衛門外數輩あり、落合の德行は中野義郷の著、藤門像實に詳なり

遠藤松齋は謙安先生の子なり、諱は常尹、孫三郎と稱し、亦た篤く藤學を信じ、能く諸生を誘導せり、其疾篤き時、星某來て邑の諸生の學を講じて討論怠らざるを告ぐ、松齋喜て曰く、諸子の研鑽して徳を進むるを聞けば死すとも恨なしと、享保十九甲寅年卒す、岩崎の大用寺山に葬る、

岡山先生の弟子、森代松軒を記して曰く、

森代松軒は五十嵐養安先生の第二子、諱は元好、平兵衛と稱す、故ありて森代氏を冒す、熊倉村に住し、亦た陽明學に篤し、なほし、延享師に至りて道を岡山先生に問ふ、延享三丙寅年七月八日卒す、年七十一、岩崎の大用寺山に葬る、

岡山先生の愛弟、東條清助を記して曰く、

東條清助は方秀先生の嗣子なり、諱は方義、熊倉組の郷頭と爲る、才徳竝に高し、母某氏も亦た貞淑の譽あり、衆皆な東條氏一家盡く賢なりと稱せり、年十三にして父母の命を奉じて京師に至り、岡山先生に親炙す、先生甚だ其の才徳を愛す、長ずるに及びて博識非凡なり、三子の後ち松齋、松軒、方義あり、各其學脈を繼ぎて其功大なり、享保三戊戌年、十一月十七日卒す、年五十四

小池左衛門、田中泰庵、平塚多助、矢部文庵、

島影文石は皆會津の人にして岡山先生の流を汲みて陽明學を信奉せし者なり、

又た特に淵氏と親密なる關係ありし東條清藏の事を記して曰く、

東條清藏、諱は次賢、熊倉組及び小沼組の郷頭と爲る、方秀の孫、方義の子なり、性嚴正なれば組中の人、皆な畏れ憚る、父祖

の教を奉じて藤學を篤信し致良知の工夫を爲せり、延享二乙丑年閏十二月二十三日卒せり

東條東休は清藏の異母弟なり、諱は成徹、清右衛門と稱す、亦た藤樹學を篤信す、家貧なるも樂を改めず、天明三癸卯年卒す、年八十五

岡山先生の孫養子となれる、葭卿先生の事は次の記事に徴して知るべし、

淵真藏は東條次賢の長子なり、諱は惟傳、篤學にして篤行あり、岡山先生の子、半平は嗣なくして没せり、岡山先生の諸弟子相謀りて真藏を會津より迎へて半平の女に配し以て家を繼がしむ、是れ即ち淵家三世の葭卿先生にして淵氏の學復大に興れり、諸公卿屢腹脚を延て以て誨學之師と爲せり、天明六丙午の年、七十有餘にして而して卒す、子真藏、諱は惟倫、孫深藏諱は惟性、皆な陽明學を信奉し淵氏の家塾に教授し、卒して東山永觀堂の墓地に葬れり

又た東條新左衛門と云ふ者あり、

新左衛門は次賢の第二男、諱は方幾、惟傳淵氏の弟なり、熊倉組郷頭と爲る、藤學を信奉して善行あり、安永七戊戌年八月十七日卒す、年六十一

猶ほ道統譜に列する所の井上作左衛門、井上安

貞、矢部湖岸、栗村伊右衛門、鈴木佐助、五十嵐忠右衛門、東條新十郎は皆な陽明學を奉じて一郷の善士と爲れる人なり、

次に北川親懿(又坂内恕三と稱す)、は會津の藤學派中の卓絶したる人なり、

北川親懿は北郷漆野の人なり、助十郎と稱し、小沼組の郷頭と爲る、孔子家語に三恕之道の語あり、取て以て號と爲す、遂に號を以て行はる、又た醫術を嗜む、聰明にして博識多く和漢の書を讀み、詩を賦し、和歌を詠じ、殊に藤學を信じ、良知の微旨を識得せり、北郷の諸生親懿を尊信し、進で學ぶ者甚だ多し、藤學是に於て復た大に興り、中野義部、井上安貞と水魚の交あり、中野は素と神道に達し、悉く之を親懿に傳ふ、實に當時斯道の泰斗にして、其名は國中に溢る、悲哉親懿没して藤學微なり、諸生は暗夜に燈を失ふを恨まざる者なし、門人甚だ多し、著書雜錄若干卷、家に藏す、文政元戊寅年八月二十五日卒す、年八十一、漆村本宮山に葬る、功龍神靈と説す

猶ほ東條武右衛門、栗村以敬、東條廣右衛門、矢部徳次右衛門は皆な藤學の信者にして一郷の傑士なり、

中野義部は會津藩士、理八郎と稱し、後ち作左衛門と改む、惜我と號す、故ありて北郷の上高額村に往するここと二十餘年なり、深く井上安貞、矢部湖岸、坂内親懿と交る、始て藤學を開き遂に良知學の眞旨を悟る、義部は吉川徂安從門二子に就きて神道の奥蘊、二事相傳を得たり、又博く和漢の書を讀み詩を賦し、和歌を詠じ、射を能くし、兵學擊劍に達す、實に多學多藝の人なり、身貧にして而かも容貌容興、天命を樂む者の如し、亦た當世の偉人なり、寛政十戊午年六月六日卒す、年七十一、城東大窪山に葬る、著書甚だ多し

其他、加藤銀藏、新明半兵衛、長島平七、石川與左衛門、五十嵐仁右衛門、矢部甚次郎、坂内伊兵衛、井上忠左衛門、矢部覺左衛門、穴澤準説、三浦友八(親馨後に常親と云ふ)は皆な會津藤學の熱心なる信者なり、三浦友八は北郷入田付村の人、諱は親馨實に坂内恕三の孫にして親陽の第二子なり、

齋藤一馬氏道統に附記して曰く、

會津の藤學たるや、彼の北郷の三子より會祖恕三君に至り、其の教道繼然として興る、學徒は數百千人に下らず、恕三君

歿して後ち、諸子の業を繼ぐ者ありと雖も、實は告朔の餼半たるを免がれず、先人三浦親馨君深く之を愷き、常に復舊の志あり、然れども嘉永安政以降は國家は外事に急にして天下騷然たり、尋で藩主松平公は京都守護職に任じ、國を舉つて武備を是れ努め、復た講學に暇あらず、未だ淺ならずして會津は四方に兵を受け、城遂に陥る、先人又た痼疾に罹りて壽を出づること能はず、明治十七年、齡七十七を以て歿す、而して斯學絕せり、先人の恨知るべし、然れども幸に本譜を草して家に藏す、其の定本たるや否を知らずと雖も、幾かに會津藤學の一斑を窺知するを得る者は亦た先人の賜なり、先人德行あり、博く書史に涉り書を善くす、著書雖餘少からず、遠近の人、事の解する能はざる、ことあれば則ち曰く、請ふ往て而して之を三浦子に質せよ、其の感字の人を服する想ふべし、一馬生れて他家に養はれ、遠く若松に在りて、膝下に教を受くること能はず、碌々以て老ゆ、今本譜を修寫し此に至つて感涙滂

沱雨の如きを覺はざるなり、大正五年二月

且つ又眞宮謙長、穴澤元章も亦藤學派の人なり
穴澤元章は準説の子なり、後ち父の名を襲きて準説と號せり、

齋藤一馬氏復た附記して曰く、

會津藤學の傳統者は藤樹先生手東裝卷の在る所を以て證と爲す、茲に傳は穴澤元章に至て而して筆を止むと雖も、此時に元章疾篤きを以て直ちに之を眞宮謙長に返し、謙長受けて而して即時再び之を先人に傳ふ、蓋し先人焉に在り、他人は敢て有せざるなり、事は手東卷末に記する所に詳なり

以上述べし所は淵岡山先生を通じて藤樹先生の良知學の會津に傳播し、明治十七年に至れる傳統を示せるものなり、今日吾人が會津陽明學の狀況を知ることを得たるは實に三浦親馨齋藤一馬兩氏の功に歸せざるを得ず、余は今道統譜を摘録するに際して岡山先生の大儒たることを知り、又凡そ道を講ずる者は恰も種子を施すが如し、努力奮勵して種子を施したらんには如何なる土地にも發芽するものなることを熟知せり、世人は藤樹先生の良知學の種子が會津に發芽せしことを意外とせる者多からん、余も實に近年始めて會津陽明學の狀況を知りたる者なり、意外なる地方に意外なる學問の發芽するやうなれども種子を播かずしては決

して發生するものに非ず、岡山先生は其の在世中に二十四個國に道を弘められたりと云へば、會津以外にも發芽を繁殖せしは疑を容れざれども、其の道統譜を撰せる者なければ今之を知るに由なきのみ、嗚呼傳道者豈に播種の業を勵まざるべけんや。

四、會津以外に於ける藤樹

岡山二先生の影響

齋藤一馬氏は更に三浦親馨氏の撰せる會津外藤樹學道統譜を公にして左の諸氏を掲げたり、之れを見て京都其他の人にして岡山先生に親炙せし者を知り得るは大に喜ぶべしと爲す、左に其の諸子を示さん、

齋藤玄佐は京都の人なり、初め浮屠氏と爲り後ち岡山先生を師として儒に歸し、常に藤尾富松二氏と先生に侍し、諸邦より來て資を先生に執る者は必ず先づ三人に依れりと云ふ、元祿十三庚辰年十月二十九日卒す

藤尾久左衛門は京師の人にして岡山の高弟なり、元祿十五壬

午年八月二十九日卒す、年七十七。

富松祐庵は京師の人なり、岡山先生の高弟にして常に先生に侍し先生の爲に書翰往復の事を穿る、好て和歌を詠じ會津の重臣友松氏興と贈答の歌あり（氏興は會津藩祖正之の老臣なり、正之の國を治むる多く其方に頼る）贈答の歌を名て鸚鵡返と曰ふ、元祿十六癸未の年、九月七日卒す

氏興の贈歌

歌の道誰にか問はん古の

道を學べる人ならずして

祐庵の返歌

「誰にかは問はん」

石河文助は農家に生れ京師に至り、教を岡山先生に受く、學徳日に進む、後ち勢州安濃津候の聘に應じ、儒官に任じ、祿二百石を賜ふ、同藩の久世氏玉木氏の外、門人頗る多し、子、文左衛門、孫權太輔、曾孫右門世々儒を業とす、藤樹學絶せず田中全立は岡山先生の高弟なり、日向國、延岡城主、牧野侯招聘して儒官に命じ客禮を執る、江戸藤樹學の祖と爲る、門人頗る多し、二見直養其の尤なる者なり、淺草の淺草寺内の壽徳院に葬る

二見直養は姓は度會わたらい、氏は二見、諱は忠直、勘兵衛と稱す、後

ち新右衛門と改む、初め伊勢山田の祠官と爲り後に江戸に住し、教を岡山先生の高弟田中全立に受け深く藤學致良知の奥旨を得たり、藤學は直養に至つて益々明かなり、門人會津の島影文石は直養が諸生と應答せし書を編輯し、題して直養芳翰と曰ふ、享保十八癸丑の年七月十八日卒す、年七十七、江戸の谷中の感應寺内の養善院に葬る、猶は次の一節を參考すべし、

二見忠肥直養稱三新右衛門、會津人、受三葉淵宗誠ニ後居ル江戸二大傳唱ニ湖學ヲ、幕府及諸侯之士信徒甚々衆シ、時ニ執齋ハ在テ下谷ニ講ニ餘姚學ヲ云藤樹先生全集の編者佐藤一齋（ニ同時大坂人後原元博の説）

市川小左衛門諱は時保、備前岡山の新田池田丹波守の臣なり
二見直養を師として良知學を信せり

川村武右衛門は勢州桑名の人にして二見直養を師として藤樹學を尊べり

赤城誠意は宗兵衛と稱す、若松の北小路町に住し、其の名主職と爲る、二見直養を師として藤樹學を承け孝を以て聞ゆ、行狀は會津孝子傳に詳かなり

岡山先生の直弟子、難波先生の事を記して曰く

難波先生、氏は木村、諱は勝政、宗十郎と稱す、大阪の人なり、岡山先生に親炙し、良知の眞旨を體認せり、諸生成稱して難

波翁と曰ふ、實に岡山門下第一の弟子なり、世に云ふ本邦良知の學は藤夫子之を唱へ、岡山子之を述べ、難波翁之を繼ぐと又曰く、藤夫子の學は岡山水村二子に至つて而して備はると難波翁の門人甚だ多し、享保元丙申の年、六月二十五日卒す、年七十九、大阪の寺町専念寺に葬る

松本以休は作州の人なり、美作守の臣たり、仕を致して後ち京師に赴き、良知の學を難波翁に受け學術日に進めり、享保三戊戌の年、八月三日京師に卒す

植木是水は若州の人なり、難波翁の高弟たり、商家に生れ書を讀まず、文字を作らず、而かも資性聰明にして深く良知の學を信じ、常に曰く萬卷の書は皆是れ心の註解のみ、又曰はく行本なり、文字は未なり、不學の賤民と雖も君子の域に入るを妨げずと、自ら陸象山王陽明の遺意を得たる者と謂つべきなりのより野依忠右衛門は京都二條城の兵士なり、難波翁没後、斯道を京都に講ずる者忠右衛門其の一に居る、大虛寥廓性靈一貫の旨を悟り得たり、其の没するや二見直養甚だ之を惜めりと云ふ、

大島如水は會津北郷中なかのみやう之明村長なり、教を木村宗十郎、松本以休二氏に受け、島影文石、赤城誠意と時を同じくせり

井口七右衛門は江戸の人なり、岡山先生に就學し、常に大志を懷て曰く、藤樹學を異域に傳へんと欲す、而して天は年

を假さず、短命にして死せり、藤學の不幸なり

櫻井半右衛門は肥後國某藩士たり、岡山先生に親炙し、篤く藤學を信じ、人告ぐるに己が過を以てせば則ち告げし人の姓名と其の日月とを書し以て自ら戒て而して常に之を携ふと云ふ、

森雪翁は會津の人なり、諱は守次、與兵衛と稱す、岡山先生に親炙し孝を以て聞ゆ、享保年中に會津孝子傳を撰す

磯部源左衛門は會津北郷笈川組の郷頭なり、八九郎と稱す、

岡山先生に親炙せり、父母に事へて孝なり、性武勇を喜び、藩士桶口義光を師として兵法劍法を修め、又た家訓を作りて子孫を戒むと云ふ

以上は専ら三浦親馨翁の會津外藤樹學道統譜を和譯摘録したるものなり、岡山先生の事蹟を知るには極めて有力なる資料と謂ふべきなり、

尚ほ篠原元博(藤樹先生の全集の編者)曰く、

陽明學聞書有野條勝眞、小倉一倍、岡田定好、辻憲尙、數輩、京師人、受業淵氏之門、又有大内玄淳者、見識卓絶、議論英發、善讀姚江藤樹之書、且論其異處、又能辨

諸人倍藤樹說者上良可敬也、卷末載諸州學者姓名、寶永寛保之際幾三百人、除京師湖西外、陸奥江戸爲最、伊勢次之、大和、攝津、越後、美作、淡路、又次之

執齊在京師屢詣葭屋町琴卿亦嘗一詣焉 見聞書

五、 淵家の子孫其他諸件

淵氏の初代を岡山先生とすれば第二代は淵伯養惟直にして元文元丙辰年十一月十三日歿せり、

余初め岡山淵家二世の歿後遠く二百有餘里を隔つる會津より東條氏の子を迎へて養子と爲したるを怪めるも今此の道統譜を讀み且つ齋藤一馬氏が談を聞きて其の偶然ならざりしを知れり、齋藤氏曰く、東條葭卿が岡山先生の孫養子と爲れることは、葭卿の祖父、東條方義が十三歳にして京都に上り、岡山先生に學び、先生の爲に非常に愛養せらる、元來十三歳の幼年にして二百里を隔つる

京都に遊學することは岡山先生と東條家との間に餘程親密の關係があつて遂に葭卿が淵氏を繼きたるものなり、唯だ普通の師弟の義のみとは思はれざりきと、

次に齋藤氏は淵岡山先生の郷里が仙臺たることを説きて曰く、余の曾祖父北川恕三の記録に徴して岡山先生の郷里の仙臺たることを知るべく、其外「恕三覺書」に岡山先生の仙臺下りの事及び其の供をして行ける人名を記し、且つ先生が途中に會津に立寄るゝ様、會津より使者を立てたる時其の人名をも記載すれば岡山先生が仙臺の人たりしことは明かなりと、

(第三代)葭郷淵先生之墓——(原漢文、正二位清原宜條卿撰)先生諱は惟傳、字は貞藏、葭卿と號す、大父は東條次賢、大母は條氏なり、先生は正徳乙未正月二十七日を以て東奥會津の傍なる高額邑に生る性、敦厚にして學を好む、淵氏の曾祖

岡山は業を藤樹先生に受く、學成りて後ち、京師葭屋街に塾を設け學を講ずること年あり、祖伯養は業を繼ぐ、一男一女あり、男先づ歿す、嗣なし故に門人共に議して先生を會陽に迎へて其業を繼がしめ以て其女(清淑)に配す、男女を生む(清淑)先づ亡す、男は惟倫なり、女は膝公強に適ぐ、後ち堀池氏を娶る、二男一女を擧ぐ、男は共に夭す女は岩崎氏に嫁せり、天明二年壬寅二月四日終ふ享年六十八、東山禪林寺に葬る、銘に曰く、

葭卿先生、有_レ才有_レ徳、刻_ニ文_ヲ此碑_ニ、以_テ貽_ニ厥_ノ嗣_ト

第四代を章甫先生と爲す、墓碑に曰く(原漢文)君諱は惟倫字は良藏章甫と號す、淵葭卿君の長子なり、母は半平君の女、初め半平君は嗣なし、東條氏の子を養ひ女を以て之に配す、是を葭卿君と爲す、君は家學を承け講業を懈らず、伊村氏を娶る、先づ歿す、再び福岡氏を娶る亦た歿す、二男

七女あり、寛政己未九月二日病歿す、年四十九、
禪林寺先塋の側に葬る、男惟倫建つ

第五代は高山宗節居士と爲す、天保六年未五月
七日歿す蓋し惟清の法諡ならんか、

清岳法心禪女、蓋し惟清君の女ならん、七十歳
以上にして明治十五年に歿せりと傳ふ、法心尼は
淵氏血統の最後なるものなり、中間に醫福井氏の
弟子河原敬治源有善と云ふ者淵家に入家せし後ち
醫を業と爲し時ありしも淵氏を襲ふに至らず、終
に歿し、淵家は法心に還附したりと云ふ。河原敬
治が藤樹先生二百年祭に書院に詣で獻せる祭文は
詳に自己の經歷等を叙べ、陽明學雜誌第九號にあ
れば就て見るべし、現今の淵留吉と云ふは血統を
引ける人にあらざること後に詳述するが如し、
次に第三代たる葭卿先生の配たる清淑淵氏墓の
碑陰記に徴するに曰く、(原漢文)

清淑諱は關、姓は淵氏、京師に生る、其の先は日向國の人なり
岡山諱は惟元字は源右衛門の孫、伯養、諱は惟直、字は半平の

女、母は本所氏實は樹下氏の生む所なり、伯養に二男あり、長
は正藏と云ふ、早く歿す、次は發疾あり、伯養既に卒し、門人相
議して本所氏の命を以て東條惟傳を會津に迎へ、其の祀を奉
ぜしめ、妻はすに其の女を以てす、即ち清淑なり、一男一女を
生む、寛延四年辛未八月十九日病て卒す、私に諡して清淑と曰
ひ、洛東禪林寺先塋の次に葬る、惟傳建つと云

今此の碑陰文に據りて清淑と葭卿の關係を詳か
に知り得たるも、淵氏の先は日向國の人なりとあ
るに、淵岡山先生は奥州仙臺の人なりと云へると
は之を如何に調和すべきや、或は日向國の人にし
て仙臺に轉住したる頃に岡山先生は生れたるもの
なるか、然れども是れ唯だ余の臆測にして確證あ
るに非れば尙ほ他日の研究を要するなり、

却說淵岡山先生が藤樹良知の學を承けて京都に
來りて私塾を開きて斯道を講じつゝありし頃には
藤樹先生慶京都に來られ淵家を恰も別莊の如くし
宿泊せられし由に傳ふる者あり、南川の閑散餘録
には藤樹先生が別宅を京都葭屋町一條邊に有した

りと云ふ、孰が是なるを知らず、且つ又た藤樹先生歿後は淵家に藤樹先生の祠堂を建て先生の畫像を安置して歲時の祭を爲し、其の子孫も永く其遺志を守りて先生の恩を奉したりと云ふ其の祠堂は前述の如く上京葭屋町元誓願寺下の晴明神社の近傍に在りしも安政の大火に焼失せり、其時藤樹先生の畫像は幸に取り出したらば火災を免がれ、現今は淵氏の手を離れて洛西衣笠村宇小松原福井成功氏の所有に歸せり、成功氏の長男貞一君は先日余の宅に來訪して其の畫像に就きて語りて曰く、該畫像は現今江州藤樹書院に藏して佐藤一齋の贊を爲せるものと全然同一なり、坐像にて上下の禮服を着し、肥滿せる容貌も上下禮服の模様等も少しも異りたる點なく、彩色を施せる肖像なり、之には佐藤一齋の贊はなけれども元來二枚の肖像畫を同時に畫きて江州の書院と京都の淵塾とに分藏したるものか、或は藤樹書院に藏せし畫像を模寫

して淵塾に安置したるかなるべし、然るに志村仲昌の著たる藤樹先生行狀聞傳には「元來先生肖像は京葭屋町岡山子、爲三信仰一母堂榮松公へ談じ、御容體を吟味而狩野某畫三枚書せ一幅は尊信の爲め土藏におさめ置二幅は信仰の門弟へ送らるゝ」
と、現今江州の藤樹書院に保存する最古の畫像が即ち是の一幅なりと聞けば他の一幅が岡山子の手元に保存せられて今日は福井氏の手に歸せるなり猶は残りの一幅は何人の所藏と爲れるにや、切に知らんと欲する所なり、志村翁の聞書を得て上述の疑問は解決されたり、尙ほ東正堂氏の談に據れば會津地方にも藤樹岡山兩先生の畫像ありと云ふ
淵宗誠家藏藤樹先生眞一幅、吾友津川仲通嘗就德岡氏得請寫之、先生儀貌豐碩、朗目疎眉髮、著肩衣及袴、垂手端坐、瞻仰之、不覺起敬
一齋佐藤君云、書院藏先生故衣數稱、皆極

淵大、意疑何等驅幹解ニ穿了這樣衣、後瞻ニ茲
像ヲ方信ニ其堪レ用、

又書院有_下先生著_ニ深衣_一像_上大失_ニ其真_一矣（後原元博説）

兎に角淵家祠堂の藤樹先生の畫像が鄭重に福井氏に珍藏さるゝことは喜ぶべきなり、現今の淵氏の主人は留吉と稱し、大工職にして學問の趣味なく且又維新後徵兵制の發布されたる頃に徵兵を避くる爲に親子の關係を附するの風習の行はれたる時期ありしが、其頃留吉は徵兵を避けんが爲に淵氏を冒かしたるものにて血統上に何等の關係もなきなり、淵家歴代の遺物も今は悉く焼失又は散逸して一物を存せずと云ふ、

岡山先生の血統は天保の末年没したる法心尼と云ふ老女にて絶わたる由にて、其後は養子にて淵家を繼ぎしなり、上述福井氏は歴代御殿醫にて有名なる醫師なりき、福井氏の門人醫者河原敬治が

淵家の養子と爲りて後は醫を業としたる時期もありしなり、河原が淵岡山先生の年忌に當りて作れる祭文を江州の藤樹書院に保存すと聞けり。

却説岡山てふ號の出所は、傳には洛外の岡山に住せしが故なりとせり、案するに洛西妙心寺の西方御室仁和寺の南門前に雙岡_{ナラガ}てふ小丘あり、是れ則ち淵岡山先生が住せられし地なり、有名なる吉田の兼好法師の如きも、其の住宅は常に雙岡に在りて吉田神社に勤めしものなり、此岡は古來京都に來寓する學者の好んで住する所となれり、雙岡とは其丘狀の中央部が少しく低くして兩岡の並ぶが如く見ゆるが故なり、蓋し先生は葎屋町に移轉する前に此岡に住せられしならんか、葎卿と云ふ號は淵氏の塾の京都葎屋町、元誓願寺下る、安倍晴明神社の近傍に在りしに因みて號とせしものならん、

更に考ふるに岡山諱は惟元と云ひ、或説には宗誠

と云ふ、今掲げし書面の題目にも宗誠とせり、蓋し諱は惟元にして字は宗誠と云へるか或は兩者を諱とすれば藤樹先生に就學せし頃までは宗誠と云ひしも、後ち藤樹先生を崇拜するの餘り遂に先生の惟命の例に倣ひて惟元と改名せしものならんご推察せらる、三浦親馨翁の撰に係る會津藤樹學道統譜にも、「諱は惟元、四郎右衛門と稱し、故ありて源右衛門に改む」と云へり、然れども宗誠に就きては未だ確説を得ず、淵宗誠と淵惟元と全く別人なるやも未だ知るべからざるなり、余は切に此疑問を決定するの資料を獲んことを希ふ、但し余は今唯だ宗誠と惟元とは一人として之を論ずるものなり、

後原元博曰く(藤樹先生全集の編者)

淵宗誠^{師源}陸奥會津人、師事藤樹先生、又奉^{兵輔}神教、初居^{兵輔}洛之雙岡、號^{兵輔}岡山、後家一條葭屋町、先生去^{兵輔}豫慮有^{兵輔}後命、寓^{兵輔}淵氏

待^レ之閱^レ月而歸^ル、先生下世、宗誠思慕弗^レ止、己^ニ立^テ祠^ヲ園中^ニ、勝^ズ曰^ク高千穂大明神、一^ト歲時祭薦、作^レ詩記^シ之^ヲ、詩雖^レ闕不^レ成^レ語、以^テ謂^フ皇國^ノ神人^ト西土^ノ聖人^ト其^レ揆^一也、天生^レ藤樹^一以^テ明^ニ聖道^一即^チ明^ニ吾神道^一也、蓋^シ神武帝以降邈不^レ可^レ得^ル者而今^一視^レ之^ニ矣、豈可^レ不^レ尸^テ而祝^レ之哉、其尊信如^レ此、宗誠^ニ子孫世^ニ業^ス儒^ノ、天明戊申之災、其家爲^ニ焦土^ト、先生祠獨^リ得^レ不^レ燬、衆固以爲^レ祀^ト稻荷^ニ於^テ是^ニ翁然盛傳^レ有^レ靈^云。

六、 結 論

上來論述せし所に徴するも岡山先生が藤樹門下の碩儒にして其門に教を請ひし學徒も頗る多かりしを知るべし、今岡山先生と蕃山先生とを藤樹の二大儒として比較論評せんか、蕃山は雄材大略當時の政治界に英名を轟かし、備前に於て著明なる事業を成し、且つ著書も少からざれば後人其豪名を

聞きて之を追慕せざる者なければども、蕃山が藤門に學びし頃は藤樹先生が全然程朱學を信奉せし時にして其後も蕃山が備前に在りて巨腕を奮ひ名聲籍甚たる時藤樹先生は陽明學に入り、書面を以て之を蕃山に知らしめたることは蕃山の遺書に徴するも、又其年代に考ふるも疑ふべき點なし、然れば蕃山の陽明學は主として通信に由り又た數回の面會に由りて受得したるものなり、然れども陸王學は元來簡易直截にして頓悟的傾向を帶ふるものなるも、蕃山が天資聰明絶倫精力超凡なるも、其の學力の既に充分なるに由れば通信と數回の面會にても充分に良知學の奥旨を了悟するに難からず、況んや藤樹先生は至大の感化力を有せし人なりしをや、此の如く蕃山は陽明學を承けて直ちに政治教育に施し赫々たる成功を見るに至れるなり岡山は元來仙臺の隱士にして江戸に出て一尾伊織に仕へ、一尾の食邑の江州にありしを以て慶主命を奉じて江州に來り遂に藤門に入りて高弟と爲りしなり、既に仙臺の隱士と云ひ、一尾に仕ふと云へば岡山の年齢の既に中年以上に達せしを想はしむるものあり、其入門の年齢を知らざれども藤樹先生が既に陽明學を信奉して後なりしことは推知すべく、隨つて藤樹先生の教導法も以前よりも簡易直截なりしならん、且又岡山先生も質實にして守約内省的の人なりしが如く、專心一意藤樹學を遵守して之を後進に傳へたるものならん、故に別に自己の新説を立てず、又た著述をも爲さず、純ら私塾に在りて講義を爲し、ものならん、然れば其當時に在りては世に幾分か知られざるに非るも到底熊澤蕃山の豪名なるが如くならず、且つ蕃山と岡山とは均しく藤樹先生を師とすれども、其就學の時期に前後ありたれば親密の交際なかりしやも知るべからず、況や其の性質と其境遇とを異にしたれば其の學問を應用する方法の相同しからざ

るは固より怪むに足らざるなり、凡そ教を受くる者は其性の近き所を得る者なれば一師の下に學べる諸弟子が各自其の了得受用する所の異なるは豈只岡山と蕃山との例のみならんや、蓋し蕃山は之を施政上に活用するに長して其功を奏し、岡山は之を遵守して後進に傳授するに力めて其勳を建てたり、而して共に藤樹門下の鴻儒たるを失はざるなり、岡山蕃山と同門に清水季格と云ふ者あり又た深く藤樹先生を尊信したれども其の得る所は亦た同じからざりしなり、次の一節は能く岡山蕃山季格の間の消息を知るべからん、

篠原元博曰く

伊像人清水季格、

後冒西川氏一

深々惡ニ伯繼ヲ、著シ和書

顯非二卷ヲ、痛ッ排下其學倍ニ師說ニ別ニ成一家上

然_{トモ}季格學ハ庸陋孤單、非ニ伯繼ノ匹ニ、且ツ其

於ニ和書ニ先ッ懷ヲ忿疾ヲ讀ミ之卒爾ト立レ言ヲ多不

レ中ニ青紫ニ、若キ四勿誠意章ニ、藤樹原自ラ有レ説、

第二卷 叢說 隠れたる陽明學者―淵岡山先生

讀ニ和書中云々即チ藤樹之説、而季格不ニ之知ラ反_ラ力_テ詆_レ之何也、初藤樹之去_レ豫也、季格也思慕弗_レ已、即告_レ侯辭_レ祿_レ湖遂受_レ業、藤樹歿至ニ元祿初ニ乃著_ニ是書ニ蓋其進取之銳、親炙_レ之久、諸弟子少_レ及而視_ニ其所_ニ成就_ニ者淺々如_レ此亦可_レ異也哉、當時淵宗誠亦不_レ喜_ニ伯繼_ニ故_ニ其徒多_シ議_レ之而料_ニ其所_ニ見畢竟讓_ニ伯繼_ニ遠_シ矣

上來編述せし所を以て略淵岡山先生が如何なる人なりしかを察知するを得べけん、我が此の編述を企つる唯だ隠れたる陽明學者を世に紹介して以て王學宣揚の一助と爲さんとするのみ、而して用ふる所の資料は皆な先哲又は先輩諸氏の熱心なる探究に得るものにして余は未だ一事實だも發見したることなし、是れ深く恥づべしこと雖も今姑らく獲る所の資料を用ひて梗概を叙し、今後益討究を重ねて其詳傳を草せんことを冀望するのみ。

第二號 五三 (二三九)

七、參考書

此の論傳の主なる參考書は左の如し、(一)、會津藤樹學道統譜——及び會津外藤樹學道統譜——三浦親馨撰——(二)、同上補記——齋藤一馬撰——(三)、藤樹先生全書——志村巳之助編——(四)、藤樹先生全集——筱原元博編(此書は未だ之を見ず、江州青柳村小川喜代藏氏に依頼して書中の岡山先生に關する事項を知り得たり)——(五)、「陽明學」雜誌第八、九、十の三號——笠井勅、小川喜代藏兩氏共撰の淵岡山傳(有益なる材料に富めり)及其遺文等——(六)、藤樹先生行狀聞傳——志村仲昌撰——(七)、藤樹先生年譜——河田剛撰——(八)、淵岡山先生書簡——(九)、閑散餘錄——南川維遷著

三百年前日本と臺灣との經濟的關係に就きて

文學博士 内田銀藏

往古我が邦人は臺灣をタカサゴと呼びたり。或は高山國、或は高砂、或は塔伽沙古など、書す。元和中、日本に在留せる英吉利人の書きたるものには *Tacca Sanga* 若しくは *Taccisanga* と見ゆ。(例へば『コックス日記』一六一年十月三十日及一六二一年三月八日の條)。現今臺灣鐵道縱貫線南方の終點にして西海岸南部の要港なる打狗の邊には、もとタアカウ社と稱する蕃族占居せり。それよりして港を打狗港タカカウといひ、其の北角に聳え、海拔一千百六十七尺、遠望すれば島の如く、他陸の煙霧に没する時にもなほ識別し易く、此の海岸に於ける最要の目標たる山を稱して打狗山タカカウと稱するに至